

福井県医師会

だより

第628号 平成25年(2013)10月



豊穣の刻 鯖江市 清水 元博

表紙写真説明：豊穣の刻

鯖江市 清水 元博

昨年10月中旬の福井市大土呂町付近の一コマです。

福井県は、ソバの生産量が全国の都道府県で6位(1,940t、2011年)というそば処です。

蕎麦の歴史は大変古く、越前の戦国大名朝倉氏の七代目孝景公は、「諸国の文化や風俗のみならず、庶民の事情にも明るかった」とされ、異常気象や災害に伴う飢饉や戦時のための非常食として蕎麦の栽培を奨励しました。

江戸時代には、福井藩家老の本多富正が、荒地でも栽培し易い蕎麦の栽培を領民に奨励した記録が残っております。又、富正は蕎麦に大根おろしをかけるものを作らせました。これが「越前名物おろし蕎麦(越前そば)」の始まりとされています。

撮影時は夕暮でしたが、疾走するJR列車を流し撮りすることで、夕日に映える広大な蕎麦畑を表現することができました。

醫 縫 録

福井市医師会長に就任して

福井市医師会長 三 崎 明 孝



錦繡の候、会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

6月6日福井市医師会総会にて、福井市医師会会長に選出され、就任致しました。有能な先輩を差し置いたの椿事に、慮外者と思われた方も多きことと存じます。未熟者ではありますが、前執行部での経験を踏まえ、会員の皆様のご協力のもと、医師会運営に取り組む所存です。よろしく願い申し上げます。

想定外と言え、数か月前から、86歳になる母が天井裏でネズミではない何かが走り回っている音がする、不気味で眠れないと言いだし、ついに我が家にも認知症患者が…と覚悟を決めておりました。というのも、拙宅は鉄筋コンクリート2階建てで床下にもコンクリートが張ってあるので、動物が入る余地はないと思っていたからです。89歳の父は難聴気味で当てになりませんし、とりあわずにいたのですが、私の姉が訪れた折に母の言うとおりの状況が起きたというので、害獣駆除業者に調べてもらったところ、果たしてイタチの親子が住みついていたのです。昨今はエサの豊富な町中にイタチやアライグマが住みつき、駆除の依頼が結構あるとのことでした。再び侵入することができないよう出入口と思しき通気孔のすき間を塞いでもらいました。本当に思いもよらぬことで、母に申し訳なかったと反省しきりです。

ところで、全国の認知症患者数は推計で400数十万人にのぼると言われ、喫緊の対策課題となっています。平成17年度より福井市と福井市医師会の共同事業として、「もの忘れ予防検診」を福井第一医師会の協力のもと行って参りましたが、5～6地区ずつの検診も本年度で一巡し、終了することになりました。会員の皆様の御協力に感謝申し上げます。来年度から新たに福井市の認知症検診が始まりますが、福井市医師会は協力を惜しまぬつもりであります。

先が読めないと言え、アメリカの深謀と日本政府に巢食う新自由主義者たちの暗躍によるTPPへの参加(アメリカに利益をもたらす薬価の高止まりを画策するなど)、5%→8%

→10%に上昇する税率が医療機関の経営を圧迫する懸念のある消費税問題等、今後施行予定の政策による医療への波及の状況が予断を許しません。これは、大中県医師会会長の持論でもあります。医療保険制度は元来社会主義的互助制度で、バックボーンには「日本人の心」があると思います。黒船が来たからとて、「心」を捨てての開国はいかがなものでしょう。

卑近な例ですが、自らの診療所を営むうえで予見できなかったこととして、ここ数年の1日当たり来院患者数の激減があります。確かに近隣の開業医増加、中心市街地住民の減少、投薬日数長期化もあるでしょうが、一方には急激な高齢化進行という患者増の社会要因もあり、そこまでとは思っていませんでした。実際に2～3割は減っているようです。全国の医療費ベースでも、平成24年12月の医療給付費伸び率は3.2%と予想されていましたが、今年1月には1.8%に下方修正され、実際には1.4%に終わりました。これは、社会保障費抑制という政策意図に誘導され、国民全体に医療機関を受診することが悪であるかの如く喧伝されたことが原因となった可能性があります。戦前のように御国の為を命を捨てるのが当然だという考えならそれでも良いかもしれませんが、健康で幸福な生活を目指す現代の日本には、受診抑制政策は相応しくありません。ある先輩の先生が「一銭五厘で戦争に行く時代には医療制度なんか何の意味もない」と仰っていたことを思い出します。

最終的には国民の選択だと言われるかもしれませんが、国があつての国民か、国民があつての国なのか、二つにひとつでしょう。政治的プロバガンダに乗ったマスコミにも踊らされぬことが肝要です。

人を癒すことが医師の使命なら、医師会では人間を駒のように扱うこれらの方策に対し、大きく異議を唱えていかねばなりません。